メッセージアウトライン
民数記16:1~50
「 コラたちの反逆 」

12章でミリアムとアロンがモーセの指導者としての立場をねたみ、事件を起こしたが、今度は別の人々がねたみを起こし、大きな事件となっていく。ねたみというものはどのような人間でも持つ罪深い普遍的な肉の性質であることが分かる。→ガラテヤ5:19～21

[1-3] コラたちの反逆
「レビの子であるイツハルの子コラ」「ルベンの子孫であるエリアブの子ダタンとアビラム」
「およびペレテの子オン」(1) 「イスラエルの子らで会衆の上に立つ族長たち、会合から召し出された名のある者たち二百五十人」(2) 彼らは共謀してモーセとアロンに立ち向かった。
彼らは言った。「あなたがたは分を超えている。全会衆残らず聖なる者であって、主がそのうちにおられるのに、なぜ、あなたがたは主の集会の上に立つのか」(3)
これはモーセとアロンがイスラエルの指導者であることとアロンの家系が祭司として立てられている(出28章、レビ8章、ヘブル5:4)ことへの不満である。
確かに彼らが主張するとおり、イスラエルの全会衆は主なる神が選ばれ、ご自身の民とされた民族であった。→申命記7:6, 14:2 そして主が彼らのうちにおられることも事実。しかし、問題は彼らがこのことを主張している動機である。彼らは一見正しいことを主張しているように見えるが、その根底にはねたみがあり、本心は自分たちがモーセやアロンに取って代わろうという思いがあったのである。彼らは自分たち皆は残らず神の聖なる者であるというが、ここに至るまでどれだけ神に反抗、反逆、不信仰を重ねて来たことに気がついているのだろうか。また彼らは神ご自身がモーセとアロンを立てられたことをよく知っていたにもかかわらず、それを無視しているのである。何という自分勝手であろうか。
[4]「モーセはこれを聞いてひれ伏した」
これは主なる神にとりなしの祈りをするためである。モーセの忍耐深く、謙遜なとりなしの祈りがなかったなら、彼らはどうなっていたであろうか。モーセは神によってイスラエルの指導者として立てられた自分と、また祭司としてのアロンを攻撃し反逆するということは、すなわち彼らを選び立てられた神に反逆することであるということを知っていた。それゆえ、彼らが神の怒りに会ってさばかれないようにとりなしをしているのである。何という気高い精神であろうか。私たちならすぐに反論したり、むきになって弁明しようとしたり、怒り狂って神にとりなしではなく、さばきを求めるのでは

ないか。それゆえ、モーセという人物がいかに柔和で謙遜であるかということがよくわかる。
[5-7]「明日の朝、主は、だれがご自分に属する者か、だれが聖なる者であるかを示し、その人をご自分に近寄せられる。主は、ご自分が選ぶ者を近寄せられるのだ。こうしなさい。コラとそのすべての仲間よ。あなたがたは火皿を取り、明日、主の前でその中に火を入れ、その上に香を盛りなさい。主がお選びになるその人が、聖なる者である」
　モーセはとりなしの祈りをしている時にこのことを神に示されたのであろう。なぜこんなことをするかと言えば、香を献げることは祭司だけが許されていることである(出30:7 Ⅰサムエル2:28)が、コラとその仲間たちの主張が正しければ主は彼らが香を献げることを許されるだろうという意味である。
　しかし、モーセは「レビの子たちよ、あなたがたが分を超えているのだ」と付け加える。モーセにとって結論はもうわかっているのである。
[8-11] モーセはこのように伝えた後に、彼らが自分たちに与えられた特権を十分に評価していないことを責める。レビ部族の特権はイスラエル十二部族の中から主の幕屋の奉仕をするために特別に選ばれていることにある。→民数記1:48～54他
　幕屋の移動、設置、いけにえの動物を献げることについての奉仕、幕屋の様々な器具の管理等々。要するに幕屋(神の神殿)のまつりごと一切を彼らは委ねられていたのである。またそれは会衆の前に立って彼らに仕えるための奉仕であった。それだけ彼らは日々、神に近く生きることができた。これは他の部族にはないレビ部族だけの特権であった。
　モーセは「あなたがたは、何か不足があるのか」(9)「あなたがたは祭司の職まで要求するのか」(10) と彼らに迫り、「一つになって主に逆らっているのは、あなたとあなたの仲間全員だ」(11)とその罪を責める。「アロンが何だからといって、彼に対して不平を言うのか」(11) とはアロンは特別にすばらしかったというのではなく、ただ神のみこころ、神の選びによって大祭司としての職に召されたのであるから、アロンに不平を言うことは神に不平を言うことになるという意味が込められている。
[12-14] 次にモーセはコラと共謀しているダタンとアビラムを呼び寄せようとする。彼らはレビ部族ではなくルベン部族である。ルベンはイスラエル(ヤコブ)の長男として生まれた。しかし、父のそばめとの不祥事(創35:22)によって、もはや他の兄弟たちの上に立つことはできないと父によって預言された(創49:3~4)が、やはり心の中ではルベン部族は長子の部族だというような特権意識、優越感があったのではないか。それが今回の事件の遠因であるとも考えられる。彼らは傲慢にもモーセをののしって彼に従うことを拒んだ。彼らの言い分はモーセが乳と蜜の流れる地(自然の資源の非常に豊かな地)エジプトから連れ上って荒野で死なせようとしている。しかも彼らの上に君臨して、乳と蜜の流れる地(約束のカナンの地)に連れても行

かず。受け継ぐべき財産として畑とぶどう畑も与えてくれない。しかもモーセは人々の目をくらまそうとしている。だからわれわれは行かないと言うのである。
[15] モーセは彼らのあまりの傲慢さと身勝手な言い分に激しく怒った。いくら柔和で謙遜なモーセでも限度がある。彼も怒るべき時には怒る。「どうか、彼らのささげ物を顧みないでください」、つまり彼らの願いを受け入れないでくださいということである。そして彼は、「私は彼らから、ろば一頭も取り上げたことはなく、彼らのうちのだれも傷つけたことがありません」と指導者としての彼自身の潔白を主張する。
[16-18] それからモーセは5~7節で告げたことをコラとその仲間たちすべてに実行するように命じた。モーセとアロンはこのことを神の前で公に処理するために、彼らと共に会見の天幕の入口に立った。
[19] ところがコラは逆にこのチャンスをものにしようと全会衆を天幕の入口に集めて、二人に逆らわせようとした。彼は非常に弁が立ったのであろう。かたやモーセは口の重い人であった。
「そのとき、主の栄光が全会衆に現れた」 14:10でも同じことが起こったが、肉の目には見えないが、主は常にイスラエルと共におられて彼らの言動をはっきりと見ておられるのである。そして最も適切な時に、主は事件に直接介入するためにご自身のご臨在を明らかにされるのである。
[20-21] 主は激しく怒られ、全会衆をたちどころに滅ぼし尽くすので彼らから離れよと言われた。
[22] これに対して二人は以前の事件の時と同じように、ひれ伏して主にとりなしをする。
「一人の人が罪ある者となれば、全会衆に御怒りを下されるのですか」 これはコラ一人を指して言っているというよりも、少数の者が罪を犯せば全部をお怒りになり、滅ぼされるのですかという意味と考えられる。
[23-24] 主の答えは「会衆に告げて、コラとダタンとアビラムの住まいの周辺から引き下がるように言え」であった。レビ部族のケハテ族のコラおよびルベン部族のダタンとアビラムの住まいは会見の天幕の南側にあった。→民数記3:29、2:10
[25-26] モーセは長老たちを従えて彼らのところへ行き、会衆に彼らの天幕から離れ、彼らのものには何もさわってはならないと命じた。これは会衆が巻き込まれて一緒に滅ぼされてしまわないためであった。
[27] コラとダタンとアビラムと各々その家族は天幕から出て来てその入り口に立った。
[28-30] モーセはこの三人および彼らに属する者が、これからも普通に生きて、すべての人と同じような死に方をするなら、自分を遣わされたのは主ではない。しかし、彼らが地に呑み込まれ、生きたままでよみに下るなら、あなたがたは彼らが主を侮ったことを知らなければならないと宣言した。

この預言が事実となった時に、イスラエルの全会衆はこれらの出来事は、彼自身の考えからではなく、すべて主から出ていたことを知らなければならないのである。
[31-34] モーセのことばが終わるや否や、彼らの足もとの地面が割れ、彼らとそれに属する者、すべての持ち物も呑み込まれてしまった。地は彼らを包み、彼らは集会の中から滅び失せた。
すべてはモーセのことばどおりになった。これは神のさばきである。(31~33)
彼らの周りにいたイスラエル人はみな、彼らの叫び声を聞いて逃げた。自分たちも同じようになるかもしれないと思ったからである。(34)
[35]「また、火が主のところから出て、香を献げていた二百五十人を焼き尽くした」
　これは主が彼らを近づけず、受け入れなかったということである。このようにして主はみこころを明らかに示されたのである。
[36-38] そして主はモーセにアロンの子エルアザルに以下のことを命じるように告げられた。
① 「炎の中から火皿を取り出し、火を遠くにまき散らさせよ。それらは聖なるものとなっているから」(37)　火を遠くにまき散らせとは、消えるようにしてしまえとの意と思われる。その聖なる火を俗的なことのために用いないようにとの配慮か。
② 香を献げていて主のさばきにより死んだ者たちの火皿を取って，それを打ちたたいて延べ板とし、祭壇のためのかぶせ物とせよ。…この火皿は青銅製であった。→出27:3
「それらは、主の前に献げられたので、聖なるものとなっているから」(38)とはレビ27:28には「すべて聖絶の物は最も聖なるものであり、主のものである」と言われている。「聖絶」とは「主のために滅ぼす、献げる」という意味である。それゆえこの火皿も主に滅ぼされた者が、主に香を献げるために持っていたものとして聖なるものとなっているという意味と思われる。
「これらはイスラエルの子らに対するしるしとなる」…イスラエル人が祭壇にささげ物をするたびにこの祭壇にかぶせられたかつては火皿であったものを見て、アロンの子孫以外の者が主の前に近づいて香を献げてはならない。あえてそういうことをすれば、コラやその仲間たちのように主の怒りの刑罰を受けるようになるということを覚えさせるためであった。
[39-40] エルアザルは主がモーセを通して言われたとおり、これを実行した。
[41-42]「その翌日、イスラエルの全会衆は、モーセとアロンに向かって不平を言った。『あなたがたは主の民を殺した。』会衆がモーセとアロンに向かって結集したとき、二人が会見の天幕の方を振り向くと、見よ、雲がそれをおおい、主の栄光が現れた」
　これはイスラエルの民のモーセとアロンに対する不平である。 彼らは今回の事件の意味を全く理解せず、悔い改めようとしなかった。かえってモーセとアロンがコラ

とその仲間を殺したかのように悪く言う。このような反応からも人間がいかに心頑なで、罪深い者であるかが分かる。その時、また主が直接介入されて会見の天幕を雲がおおい、主の栄光が現れた。
[43-45] 主は心頑ななイスラエルの会衆をたちどころに滅ぼし尽くすので、モーセとアロンに彼らから離れるようにと告げられた。しかし二人はひれ伏してまたも会衆のためにとりなしをする。
[46-47]「モーセはアロンに言った。『火皿を取り、祭壇から火を取ってそれに入れ、その上に香を盛りなさい。そして急いで会衆のところへ持って行き、彼らのために宥めを行いなさい。主の前から激しい御怒りが出て来て、神からの罰がもう始まっている。』モーセが命じたとおり、アロンが火皿を取って集会のただ中に走って行くと、見よ、神の罰はすでに民のうちに始まっていた。彼は香をたいて、民のために宥めを行った」
火皿の上に盛った香の煙は天に向かって立ち上るが、それは祈りの象徴であり(黙示録5:8,
8:3~4)、またキリストによるとりなしの型であると考えられる。
コラとその仲間の二百五十人はモーセとアロンに逆らい、祭司職まで要求したが、その結果は香を献げていた全員が焼き尽くされるという恐ろしい主のさばきを受けた。しかし、モーセは今度は同じ方法をアロンに命じて、すでに神罰の始まっている民の宥めを行った。
[48-50]「彼が死んだ者たちと生きている者たちとの間に立ったとき、主の罰は終わった。コラの事件で死んだ者とは別に、この主の罰で死んだ者は、一万四千七百人であった。アロンが会見の天幕の入口にいるモーセのところへ戻ったときに、主の罰は終わっていた」
この主の罰は以前と同じように恐ろしい勢いで広がる疫病のようなものであったと考えられる。
多くの者がさばきを受けた。主なる神は恵み深いお方であるが、また義なるお方であり、罰すべき者は必ず罰しないではおかないお方であることを改めて教えられる。
今日の個所から教えられることは何か。
①人間は何度も神の力を見て，経験しても、繰り返し神に逆らう罪深い存在である。
②与えられているものに対する不満がモーセとアロンに対するねたみとなって吹き出した。
③そのような人々に対するモーセとアロンのとりなしは、神の御子イエス・キリストの罪人に対するとりなしを象徴するものである。
④神は罰すべき者は必ず罰せられるが、イエス・キリストによるとりなし、十字架の

贖いがこれを解決する。
　私たちも自分に与えられている立場、賜物、責任、役割に不平不満をもらしたり、他の人をねたんだりするのではなく、信仰をもって自分にできる最善を日々行っていく者となりたい。
　また、まだ神の救いを知らない人々、滅びに行こうとしている人々のために祈りをもってとりなし、イエス・キリストのすばらしい救いを伝えていく者となりたい。
→Ⅱペテロ3:9、Ⅰコリント10:10～11